

政治經濟科
法律科
文學科

二〇一六年度

春季企画展

早稻田の通信講義録とその時代

一八八六—一九五六

附
内容見本

出版圖書目錄

2016年度春季企画展

早稲田の通信講義録とその時代

1886－1956

はじめに

今からちょうど130年前、創立まもない東京専門学校（早稲田大学の前身）が刊行をはじめた通信講義録は、1956（昭和31）年に募集を停止するまで、実に200万人を超える人々に購読されました。

19世紀の終わり、近代的な教育制度が整備され、日本にも学歴がものをいう時代が訪れます。しかし、その時代は経済的に恵まれないほとんどの人々にとって、幼少にして夢を絶たれる理不尽な時代でもありました。上京や進学がかなわないような人々にとって、勉強を続ける数少ない選択肢が通信講義録の購読だったのです。早稲田大学では通信講義録の購読者は「校外生」と呼ばれ、規則に明記されたれっきとした学校の一員でした。

居ながらにして最新の学問に触れることができる講義録は、早稲田大学にとっては自校の教育をキャンパスの外に行き渡らせる格好の媒体であり、講義録だけを頼りに独学に励む校外生たちは、「在野の精神」を在校生以上に体現した存在だったといっても過言ではありません。

本展示会では、早稲田の特色をもっともよく表したというべき通信講義録の〈世界〉に、学校側の取り組みと学ぶ側の意識の両面から迫ります。もちろん、取り上げることができたのは70年に及ぶ通信講義録の歴史のほんの一端にすぎません。しかし、今回紹介するわずかな史料の中にも、「学び」に賭けた人々の思い、日々の苦悩や明日への希望、そして、彼らが格闘した時代の肌触りを感じることができると思います。本展示会が、学生のみなさんはもちろん、普段、教育の場に接することのない多くの方々にとっても、「学び」の意味を問いなおす機会となれば幸いです。

最後になりますが、本展示会開催に当たり、ご協力をいただいた埼玉県富士見市立図書館をはじめ、関係各位・各機関に、あらためて御礼を申し上げます。

2016年 3 月

早稲田大学大学史資料センター

※本図録に掲載した写真・資料は、展示会場に陳列したものの一部です。

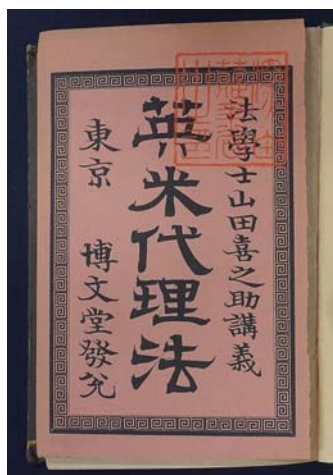
※所蔵先が記されていない展示資料は、早稲田大学大学史資料センター所蔵です。

1. 教^まゆるにも亦^{すべ}た術多かり——通信講義録のはじまり

1880年代の中ごろ、憲法発布と国会開設を数年後にひかえ、日本の国家と社会は急速に形を変えていった。西欧に範をとった法律や制度が続々と導入されていく一方、新しい知識を伝達するための教育制度や言論メディアはいまだ整っておらず、そのすきまを埋め合わせるべく、東京の私立専門学校を主な担い手として、講義録の発行が盛んに行われた。

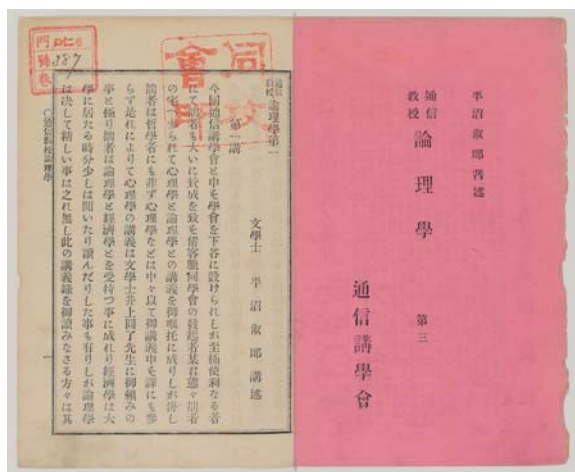
東京専門学校（早稲田大学の前身）が講義録による通信教育事業に乗り出したのは、開校から4年後の1886（明治19）年のことである。高田早苗の示唆のもと、はじめ学外の個人への委託事業としてはじまった早稲田の通信講義録は、その後、事業主体を大学の出版部へと移し、いくたびかの経営危機にみまわれながらも、長らく継続されていくこととなった。

他の講義録の多くが短命に終わる中、ユニバーシティ・エクステンション（大学開放）という明確な理念に支えられた通信講義録が、早稲田の教育をキャンパスの外、全国津々浦々に行き渡らせていった。



山田喜之助講義『英米代理法』（1886年）

いち早く通信講義録事業に乗り出した英吉利法律学校（後の中央大学）の講義録をまとめたもの。著者の山田喜之助（1859～1913）は、小野梓を中心とする鷗渡会の一員として東京専門学校の創立に尽力した後、英吉利法律学校の設立発起人に名を連ねた。



通信講学会の講義録／早稲田大学図書館所蔵

1885年にはじまった日本の通信教育の先駆的存在。執筆陣に東京大学出身者を揃え、高田早苗が東京専門学校関係者も関わった。



政学講義会の講義録 (1886年)

東京専門学校の講義を速記したもの。政学講義会は高田早苗の構想に感化された横田敬太という人物が講義録発行のために設立した団体。1891（明治24）年に学校直営となるまで、講義録の発行は彼に委ねられていた。



東京専門学校講義録広告
(1889年)



高田早苗（1860～1938）

鷗渡会の会員として東京専門学校の開校に関わって以来、終生を早稲田大学の発展に尽くした高田早苗は、通信講義録事業の発案者でもあった。通信講義学会の講義録を執筆した経験から、東京専門学校の講義内容を筆記して出版することを思いついた高田は、はじめは彼の構想に共鳴した横田敬太に経営を委託し、横田が経営を退いた後は、自ら主導して通信講義録事業に携わった。日露戦争後の経営難の際には、学内の廃止論を制し、全ての損害を背負う危険を冒して出版部の経営を引き受けるなど、講義録事業の存続に精力を傾けた。

ユニバーシティ・エクステンション

早稲田の通信講義録がはじまった19世紀の後半、欧米諸国でもユニバーシティ・エクステンション（大学開放・大学拡張）と呼ばれる高等教育普及運動が興隆していた。この運動が特に盛んだったイギリスとアメリカでは、女性や労働者階級など、それまで高等教育を学ぶ機会に恵まれていなかった人々に向けて、学外での巡回講義や講義録による通信教育が実施されていた。

1892（明治25）年、アメリカ留学帰りの講師・家永豊吉によってこの動向が早稲田に紹介されると（『英米に於ける教育上の一大現象』『同攻会雑誌』第10・11号）、翌年にはじまった巡回講話とともに、通信講義録事業もユニバーシティ・エクステンションの一環に位置づけられることになった。1910年には巡回講話と通信講義録を兼務する校外教育部が新設され、二つの事業の緊密化がはかられた。

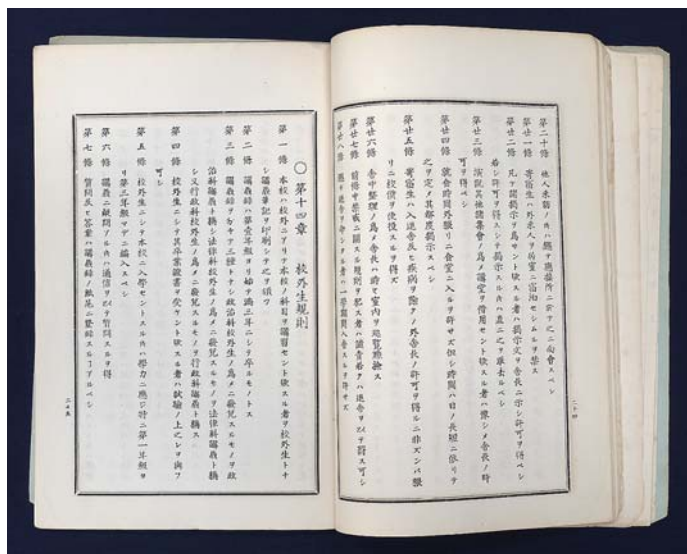


家永豊吉（1862～1936）

2. 無形の学校——通信講義録の展開

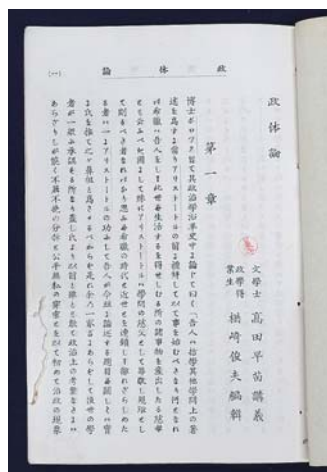
現在の制度と異なり、通信講義録を修了しても公的な資格が得られるわけではなかった。しかし、早稲田の講義録の講習者には、聴講や図書館の利用など「校外生」としての権利が与えられ、試験に合格すれば正規の課程に編入することもできた。講義録の執筆は主として正規の教員が担い、その中には学問的に高い評価を得たものも少なくない。向学熱の高まりを背景に、次第に種類を増やした早稲田の通信講義録は、20世紀の初頭には小学校以外の全ての課程を網羅し、「無形の学校」（高田早苗）と称されるまでになる。

質問・相談への対応、各地での校外生の会の開催、副読本の刊行、各種グッズの通信販売など、校外生生活を充実させる仕組みも整えられた。幾十万の校外生を獲得した通信講義録が、早稲田の名を全国区に押し上げたといっても過言ではない。



東京専門学校の校外生規則（1888年）

1888年、東京専門学校規則に校外生の待遇が明記された。



東京専門学校講義録（1889年）



早稲田大学出版部

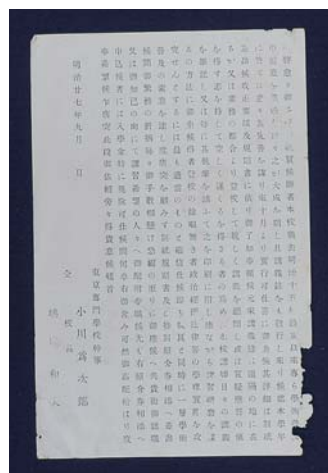
早稲田大学出版部の淵源は、1887（明治20）年、横田啓太の政学講義会が東京専門学校出版局を名乗ったことにはじまる。横田が経営から退き、学校直営になると東京専門学校出版部となり、次いで1902年、早稲田大学出版部に改称された。

当初、教務課事務室の片隅に置かれた出版部は、通信講義録事業の好調を受けて、1901（明治34）年には20坪ほどの家屋を新築。1906年に木造2階建100余坪の事務所に移り、1927（昭和2）年には鉄筋コンクリート3階建の事務所を建造した。講義録以外にも、『早稲田叢書』『大日本時代史』、雑誌『外交時報』など重要文献の発刊を手掛け、出版史・学問史に名を残す存在となった。



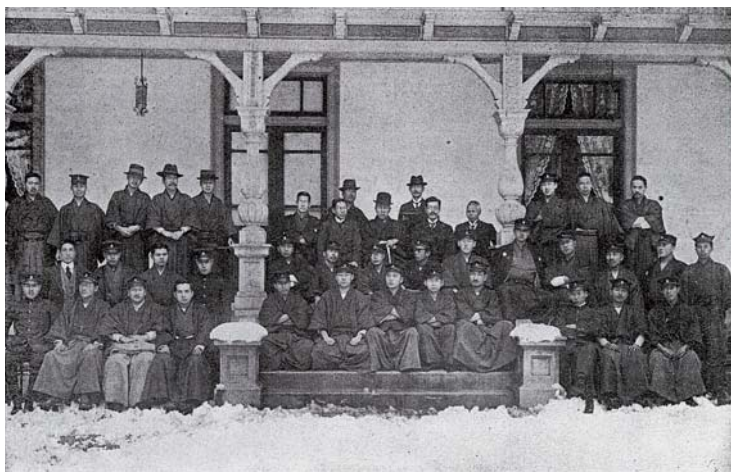
出版部講義録関係者（1930年頃）

前のテーブル、右から2人目に市島謙吉主幹、3人目が高田早苗部長。後列、一番左に青柳篤恒編集長。



岡山県久世村役場宛小川為次郎、鳩山和夫書簡（1894年9月）

東京専門学校幹事と校長の名で講義録の規則書と特別紹介券の配布を依頼したもの。



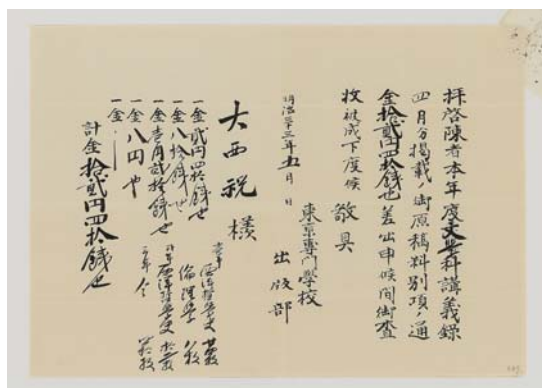
校外生出身卒業生記念写真（1920年2月24日）



はじめ
大西 祝（1864～1900）

キリスト教的自由主義の立場から同時代の国家主義的風潮に敢然と立ち向かった哲学者・大西祝は、東京大学（後の帝国大学）、同大学院で学んだ後、1891年から1898年まで東京専門学校で教鞭をとり、哲学・倫理学・心理学などを講じた。

大西が東京専門学校講義録に執筆した『西洋哲学史』は、36歳の若さでこの世を去り、著作の多くを未完のまま遺すことになった大西の代表作である。日本人による最初の本格的な哲学史とされる。

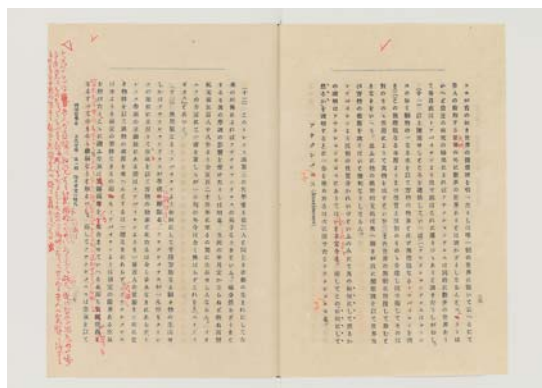


原稿料支払通知／早稲田大学
図書館所蔵

大西祝宛の講義録原稿料の
支払通知。



大西祝「西洋哲学史草稿」
(1895年)／早稲田大学図
書館所蔵



大西祝『東京専門学校講義録
西洋哲学史』／早稲田大学図
書館所蔵

校外生生活を支えた品々



ワセダグッズ広告 (1937年)



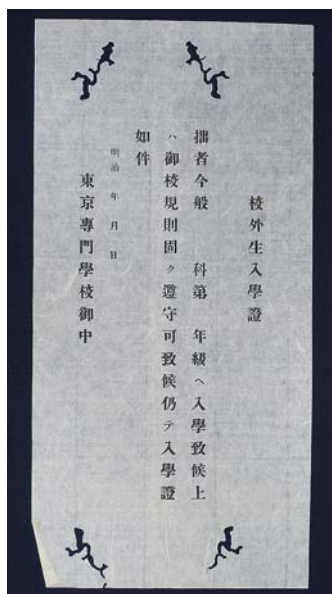
早稲田風呂敷



校外生大会記念メダル
(1937年)



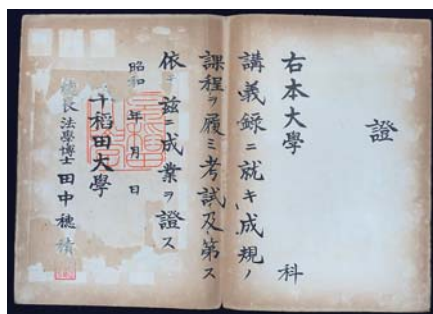
校外生大会記念ピンバッジ (1939年)



校外生入学証
(東京専門学校時代)



校外生之証
(第42回政治経済科、1922年)



講義録成業証
田中穂積総長時代 (1931~1944年) のもの。



大隈講堂で開催された関東校外生大会の様子 (1940年)

時代を彩った講義録・副読本

副読本には講師の訓話や時事解説、マンガ、投書欄、校外生出身者の経験談などが掲載された。残存数が少なく、発行期間など不明な部分が多いが、校外生の様相を今に伝える貴重な史料である。



『早稲田中学講義』



『新天地』



『早稲田高等女学講義』



『女学の友』



『高等国民教育』



『早稲田商業青年』

3. 仰ぐは同じき理想の光——多様な校外生と独学の実像

日露戦争が終結した1905年、小学校就学率は95%を越え、日本に本格的な学歴社会が到来した。しかし、小学校を卒業しても、中学校など上級学校に進学できる者は全体の一割にも満たなかった。貧困や家庭的・身体的事情などで上京や進学がかなわない多くの人々にとって、通信講義録による独学は勉強を続ける数少ない手段だった。

通信講義録を購読する目的は、多くの場合、「専検」（専門学校入学者検定試験）など各種の検定試験・資格試験に合格して立身出世を果たすためだった。校外生からは後に早稲田大学の教員となるなど、各界で活躍する人物も現れた。しかし、講義録の修了者は十人に一人ともいわれたように、独学によって成功をつかむには、人一倍の忍耐と努力が必要だった。日々の仕事や生活に忙殺され、そのほとんどが途中で脱落していった。しかし、それでも校外生たちは、講義録の中につかまの自由を感じ、それぞれの将来を夢みたのである。

一方、日清・日露戦争を経て、日本が東アジア一帯を勢力範囲に収めていくにしたがい、校外生も朝鮮・台湾などの植民地や、隣国の中国へと広がった。立身の術がほとんど閉ざされていた植民地の少なからぬ人々は、日本語で書かれた講義録の講習に活路を求めた。国際情勢の変容にも影響されて、早稲田の通信講義録は幅広く、多様な人々の許に送り届けられていった。

校外生出身の早大教員



塩沢昌貞（1870～1945）

茨城県出身。1891年、東京専門学校英語政治科卒。1902年早大講師、1907年教授。長年にわたり経済学を講じるとともに、1921年から学長、1923年に短期間、総長を務めた。「大隈重信の知恵袋」として知られた。



津田左右吉（1873～1961）

岐阜県出身。1891年、東京専門学校邦語政治科卒。満鮮歴史地理調査室研究員等を経て1918年、早大講師。1922年教授。『古事記』『日本書紀』の文献学的研究や東洋思想史研究で新生面を切り開いたが1940年、著書が出版法違反に問われたことにより（津田事件）、早大を辞した。



田中穂積（1876～1944）

長野県出身。専門は財政学。1896年、東京専門学校邦語政治科卒。東京日日新聞社を経て1904年、早大講師。1911年教授。1931年から1944年に逝去するまで総長を務め、キャンパスの整備など戦時下の学内行政に尽力した。



西村真次（1879～1943）

三重県出身。1905年、東京専門学校文学科卒。
朝日新聞社、富山房を経て1918年、早大講師、
1922年教授。歴史学、文化人類学、考古学など
幅広い分野を専攻した。



高橋清吾（1891～1939）

宮城県出身。1913年、早稲田大学専門部政治
経済学科卒。米国留学を経て1919年早大教授。
実証的な政治学の研究で知られた。



吉村正（1900～1984）

福井県出身。1924年、早稲田大学政治経済学
部政治学科卒。1932年早大講師、1938年教授。
政治学者として多数の著作を執筆するととも
に、各種の政府委員を歴任した。

校外生の実相



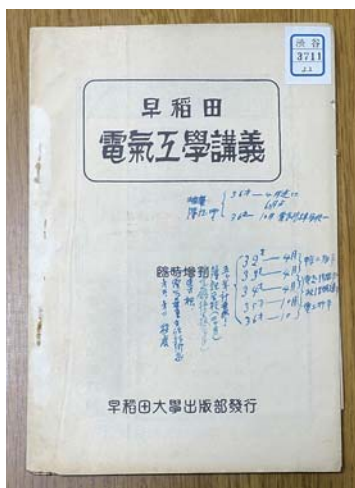
渋谷定輔（1905～1989）

埼玉県南畑村（現・富士見市）に生まれる。10代の頃から農民運動に身を投じ、小作争議や農民自治会、農民組合活動に奔走した。そのかわら詩作にも才を発揮し、1926（大正15）年には詩集『野良に叫ぶ』を発刊した。戦後は日本農民文学会結成に参画。自身の日記をもとにした生活記録『農民哀史』（1970年）も名高い。1982（昭和57）年から思想の科学研究会会長をつとめた。

埼玉県富士見市立図書館に寄贈された渋谷の蔵書には1935年から42年までの早稲田の講義録が収められており、30才代をむかえた渋谷の学び直しの姿勢をうかがうことができる。



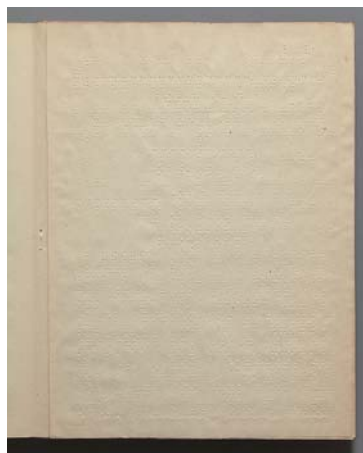
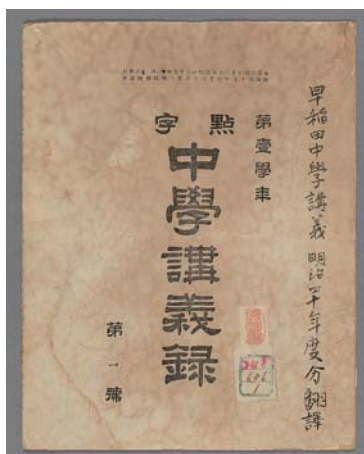
渋谷定輔旧蔵『早稲田中学講義』（1935年4月）／富士見市立図書館所蔵



「五か年計画」／富士見市立図書館所蔵

『早稲田電子工学講義』臨時増刊号（1935年3月）の表紙に書かれたメモ。資格取得までの学習計画が記されている。

障害者教育への活用



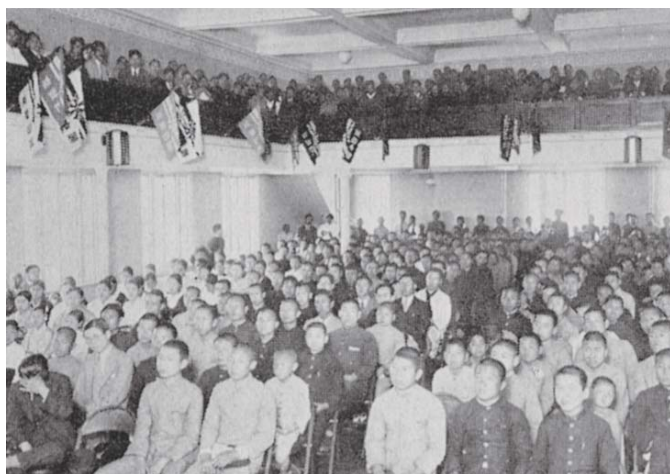
『点字中学講義録』（1906年）／早稲田大学図書館所蔵

神戸訓盲院長・左近允孝之進の計画による早稲田中学講義の点字訳。

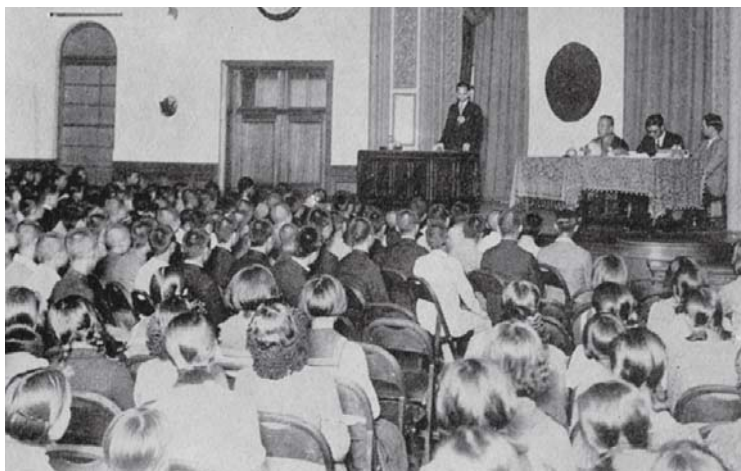
海外・植民地への広がり



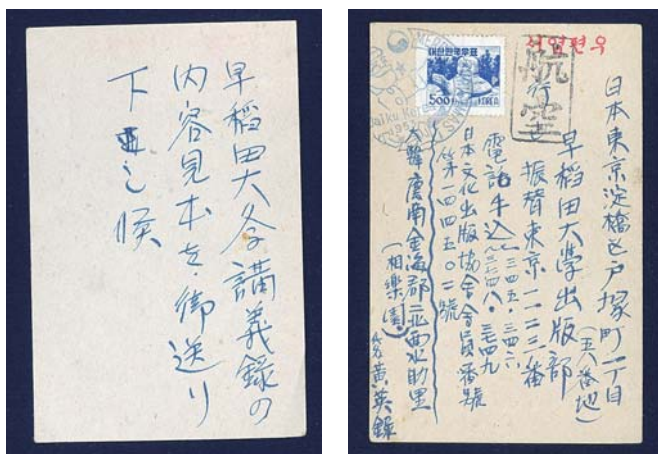
漢訳『早稲田大学政法理財科講義』（1907年2月）



京城（現在のソウル）での校外生の会（1938年）



台北での校外生の会（1940年）



講義録内容見本を申し込む書簡（1953年）

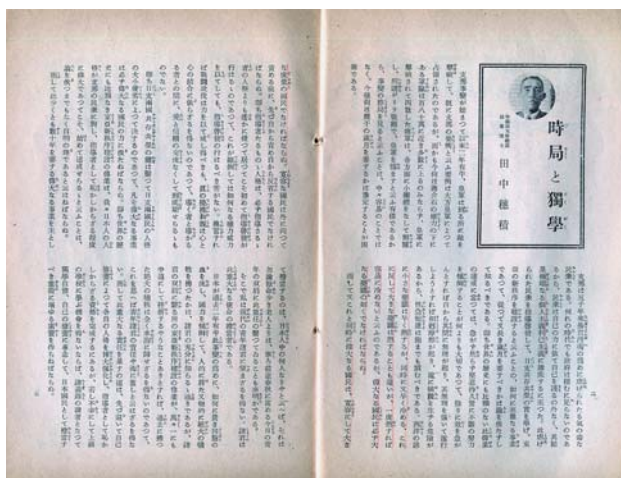
朝鮮戦争休戦後まもない韓国から送られたもの。

4. 教育民主化の精神に則り——通信講義録の時代の終わり

1930年代に入ると講義録や副読本も次第に戦時色を帯びていった。強まる戦時体制のもと、印刷用紙にも配給制がしかれ、講義録は減頁や部数制限を余儀なくされた。1945（昭和20）年3月の東京大空襲では出版部の全ての印刷物を受注していた印刷所を失い、講義録は発行不能の状態におちいった。

敗戦後、通信講義録は教育民主化の精神を体現する媒体として再び脚光を浴びる。アメリカ式の通信教育制度の導入を促すGHQの方針を追い風に、早稲田大学も新制度に対応した講義録の刊行に乗り出し、通信教育部の新設も計画された。しかし、新たにはじまった都道府県の通信教育事業との競合にさらされるなど、部数減に悩まされた早稲田の講義録にかつての勢いはなかった。勤労学生の受け皿として、1949年に誕生した夜間開講の第二学部と通信講義録との二者択一を迫られた大学は、最終的に前者を選択する。1956年、早稲田の通信講義録は購読者の募集を停止し、70年におよぶ歴史に幕を下ろした。それは同時に、門狭きがゆえに行く手が輝いてみえた独学自修の時代の終幕でもあった。

戦時と戦後



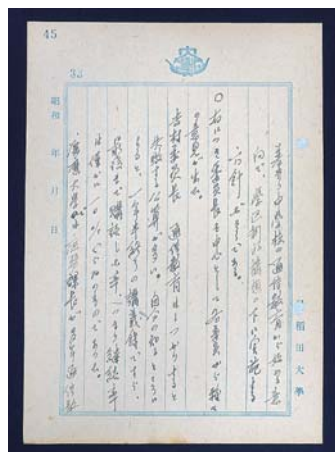
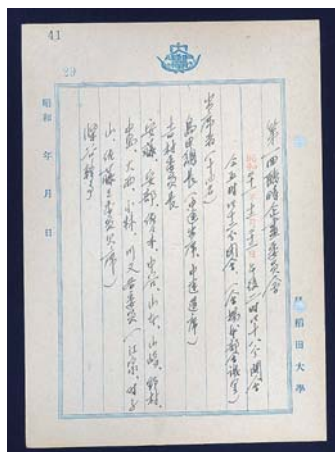
田中穂積「時局と独学」

『早稲田大学文学講義』臨時増刊号（1940年3月）に掲載。

[illegible][illegible]

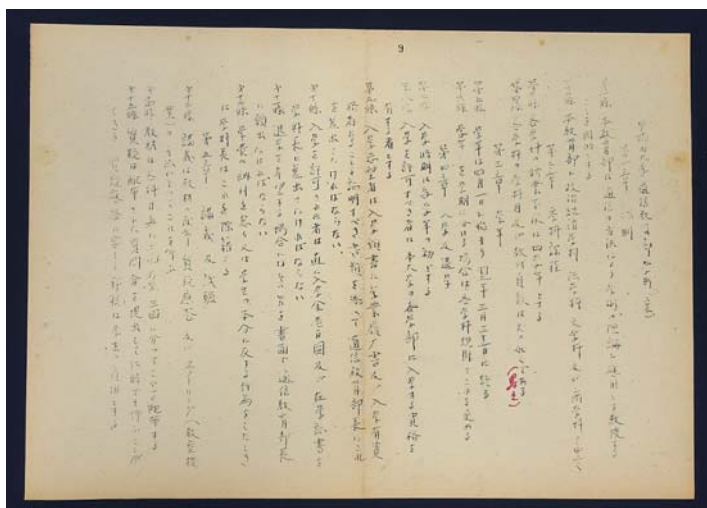
高等学校講義を講習していた海外航路の船員が、寄港先のラングーン（現ミャンマーのヤンゴン）から出版部に宛てた書簡。

通信講義録から第二学部へ

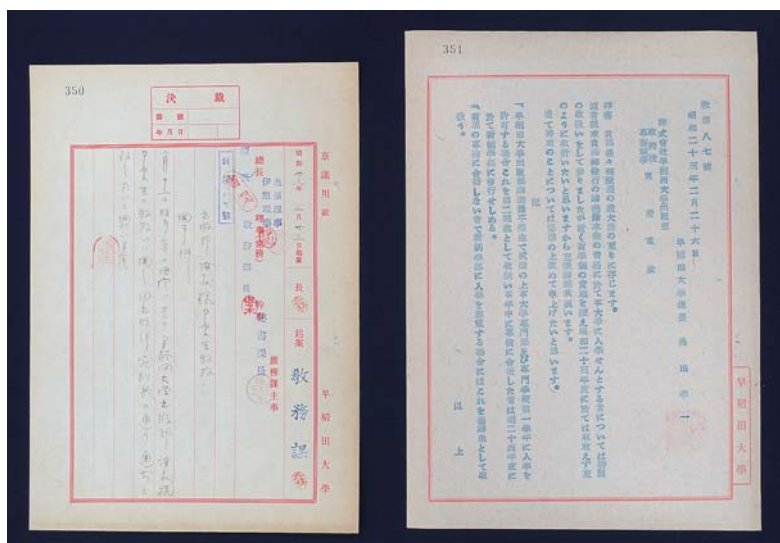


企画委員会議事録草稿（1946年12月17日）

新時代への大学の対応が話し合われた企画委員会でも、通信講義録事業の処遇は主要な検討課題だった。自身も校外生出身者であった吉村正委員長は、この時点で既に講義録の存続に難色を示していた。



早稲田大学通信教育部学則（案）（1947年）



教第八七号 出版部講義録卒業生取扱いに関する件 (1948年2月23日)
新制度に対応した講義録卒業生の編入手続きについての申し合わせ。



第二学部設置委員長協議会議事録 (1948年6月17日)



図録表紙のオリジナル

2016 年度 春季企画展 早稲田の通信講義録とその時代 1886-1956

会期 2016 年 3 月 22 日(火)～4 月 23 日(土)

会場 早稲田大学 早稲田キャンパス 2 号館
會津八一記念博物館 1 階 企画展示室

時間 10 時～17 時 ※入館は 30 分前まで

休館 日曜日 ※4 月 3 日(日)は開館

©2016 Waseda University Archives 不許複製 非売品

2016 年 3 月 22 日発行

発行者 早稲田大学大学史資料センター

〒202-0021 東京都西東京市東伏見 3-4-1

Tel 042-451-1343 Fax 042-451-1347

URL <http://www.waseda.jp/culture/archives/>

印刷・製本 (株)三美印刷



早稲田大学出版部

※この図録の表紙は、『早稲田大学講義録之栞 政治経済科講義第 23 号の 2』（1909 年）の表紙デザインを加工利用したものです。